

第 129 回日本産科麻酔学会学術集会

2025 年 11 月 22 日（土）～11 月 23 日（日）

奈良県コンベンションセンター

最優秀演題賞

木井 菜摘 先生

Q1. 発表内容について教えてください。

死産分娩は患者の精神的、身体的苦痛を伴い、長期的に QOL を著しく損ないます。欧米では、鎮静や脊髄幹麻酔を用いて麻酔管理を行うことが一般的ですが、薬剤による精神的な影響について検討した研究はありません。本研究では児娩出時にデクスメデトミジン（DEX）またはプロポフォール（Prop）で鎮静し、精神症状について自記式質問表を用いて評価する、ランダム化前向き研究を行いました。

抑うつ状態は Beck Depression Inventory- II（BDI- II;14 点以上抑うつ症状）、不安状態は State-Trait Anxiety Inventory（STAI; 41 点以上不安症状）、PTSD は Impact of Event Scale-Revised (IES-R; 25 点以上有症状）を用いて検証しました。

結果は、分娩 4 週後、DEX は Prop と比較し BDI 低値が有意に多く、うつ症状を改善することが示唆されました。また、両群で時間経過とともに抑うつ症状、不安症状、PTSD が改善し、死産分娩の麻酔管理が死産褥婦の QOL を改善する可能性を提示する結果となりました。

Q2. 研究テーマの着想から今回の受賞にいたるまでの軌跡を教えてください。

まず、実際に死産分娩の麻酔管理をしている中で、呼吸抑制がない DEX は病棟での鎮静に向いていると考え、使用したところ、Prop と比較し退院時の患者さんの分娩に対する受容が進んでいる印象がありました。また、同時期に基礎研究で DEX がミクログリアによる神経炎症を抑制することを学位研究で探索していたため、産後うつにも効果があるのではと着想に至りました。

本研究は産科は元より、精神科の全面的な協力なしには成し得なかったもので、産科医、助産師、精神科医、臨床心理士と、多くの方々にご協力頂きました。

また、死産分娩の麻酔管理は道内では当院でしか行っていないですが、診療内容上、広く患

者さんに取り組みを知っていただき受診を促すのは難しかったので、道内の助産師対象のグリーンケアの勉強会などでお話をさせていただき、賛同してくださった病院やクリニックが徐々に患者さんを紹介してくださるようになりました。5年かけて目標症例数に到達し、統計学的に有意差が出た時は本当に感無量でした。そして全症例のカルテを見直した時に、当院で次の生児分娩をして下さっている方がたくさんいることを知り、私たちの思いが患者さんにも届いていることを感じ、とても嬉しかったです。

そして、ずっと目標にしていた大川賞を受賞しました。「全ての妊婦の幸福に寄与する麻酔を提供する」、という当院産科麻酔チームの信念を多くの学会員の先生方にご評価頂けた結果だと思っています。ありがとうございました。

Q3. 基礎研究でも Anesthesia & Analgesia 誌（2024 年 IF: 4.0）に掲載歴があります。質の高い基礎研究と臨床研究の両立の秘訣は？

当講座は学位研究テーマをひとりひとり、自分の興味ある内容で挑戦させてもらえるという有難い環境が整っています。私は三次施設と大学集中治療部で勤務した経験から、救命後の患者の認知情動機能にとっても興味があったので、救命後の PND(周術期認知機能障害)をテーマとし、当講座では澤田敦史先生が研究されていらっしゃるミクログリアに焦点を当て、学位研究に取り組みました。現在は基礎研究としては、幼少期逆境体験モデルや産後うつモデルをテーマに研究を継続しています。また臨床研究として、産後のうつや回復程度をテーマに新たな研究を開始しています。

研究テーマを立案する方法は様々ありますが、私は臨床で湧き上がる疑問を基礎と臨床、どちらの研究で探究を開始することがよいかを検討し、可能であれば Translational research に発展できるように計画を立てることを心掛けています。

Q4. 臨床、研究、私生活の両立はどのようにされていますか。

両立...できているかは別として、臨床も研究も、子育てなどの私生活も、楽しく継続することを心掛けています。人を羨んだり、時間の配分が思い通りにいかず落ち込むこともありますが、楽しくないと自分自身続けられないし、周囲の方々も楽しく取り組んでいるなら、一緒にやってみたい、協力しよう、と思ってくれと信じています。

私は出産後すぐに大学院生になったので、当時は子どもとの時間が取れないことや預けなければいけない環境を作ってしまった自分を責めることがありました。「子どもを産むこと

も研究をすることも、誰に頼まれたのでもなく、自分で勝手に始めたこと」と言われたこともありました。とても悔しいと同時に、その通りだな、とも思い、悩みました。その答えはまだ出ていませんが、一緒にいる時間は短くても、“ママは仕事を楽しく前向きにやっている”ということが、子どもが何かをやり遂げてみたいと思う気持ちの後押しになるといいなと思っています。